現役高校生の皆さんに伝えたいこと

国連世界食糧計画（WFP）スーダン事務所　野副パーソンズ美緒　1993 年卒業（高 45 期）
中央大学総合政策学部・ロンドン経済大学院社会政策修士 Twitter @miomiomiomiomio

野副です。現在はアフリカのスーダンの国連組織で仕事をしています。国連のキャリアは１６年目。緊急支援、紛争解決、和平構築に加えてレジリエンス（社会の強靭性を高める開発）を専門とし、世界の８億人を超えると言われている飢餓人口・食糧問題を軽減すべく毎日仕事に奮闘しております。今回、「先輩からの手紙」を書くにあたって、自分が昔書いた文章を整理していたら２００１年に自分が大学院が終わったあとに書いたものが出てきました。自分でいうのもなんですが、なかなかいいことを書いてて、今読んでも古くない。ぜひ、一緒に読んで欲しい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

いつからか歴史や世界情勢が暗記のネタではなくなった。何年に誰が何をしたか、というマークシート用の『知識』のインプットから卒業して、それがどうしておこったか、今にどうつながっているかというストーリーを楽しむようになった。自分が日々遭遇している小さなかけらそのものが、私達が過去と呼んだり未来と考えている時代の大きな流れの一部だと認識するようになった。会った人、見たもの、感じたものの積み重ね、過去通過した全ての感情、経験、意識の結果が今の私である。

自分とはいかなる存在なのか？何がしたいのか？過去に価値を付加するのはいつも現代の人間であり、現代の評価は未来の結果が物語る。若くて守られている時代は、ただ漫然と目の前を通り過ぎる時に身を任せることもできる。しかし、何かそれでは足りないのではないかと、もがいてみるのが若者、時間と気力が十分にあるものの特権である。限りなく沸くほとんど無意味な雑念を牛の胃袋のように反芻させて、自分の哲学を構築する時間と体力が昔はあった。今も実はあるのだが、お金や情報量、表層的に自分の存在を評価するモノにあふれて忙しくしていると、自分の原点をみつめなくてもそれはそれでどうにかなってしまう。自分の中にある特権には無自覚であることが多い。もったいない、というのはそ

の時代を過ぎた実際忙しい大人になってからの視点だ。今私が高校生だったらそういわれたら「うるせーな」と言ってしまうかもしれない。

下宿にこもってドストエフスキーをひたすら読んだり、喫茶店で社会情勢について語り空き時間を存分に消化した先人たちは日本を、戦後の無の状態から経済で世界ナンバーワンの位置まで到達させたが、副作用か、落し物か、快適だが「真剣に悩むこと」を必要としない今の世代につながった。物質的な豊かさは人間を麻痺させる。勉強を懸命にやって通過点だけクリアしたら、だらだら遊ぶ、本も読まず、バイトで金をせっせと稼ぐ。考えることがめんどうで、勉強もそこそこして、あとは楽しい生活を送ればよい、そんなお気楽に固定されていた社会の構造が、バブルではじけ国際的な競争の濁流に呑み込まれた。テクノロジーやビジネスは国境を越えてすさまじい勢いで変化を見せているが、それを使いこなす側の人間が追いついていない。危機感が生活の実感として伴うことは少ないものの、昔の価値観が今に通用しない世代間や貧困格差に加え、現在に生きる人間と社会環境のギャップが広がっている。その歪みがいきつく先が、キレる子供であり、自殺者が３桁をこす時代の不透明感であり、環境問題であるまいか。

ネットがどんなに発達しても結局のところ、核になるのは人間と人間のぶつかりあいで、自分の意識改革なくして次に進むことはない。個人があって、集団があって、そして社会が形成されていく。自我と社会的責任の乖離、騒がしい流れの中で自分の位置も目標も見失ってしまったら、私達はどこへいくことになるのだろう。

世界の大きさ、奥の深さ、そしてちっぽけだが確かな自分の存在を感じる瞬間を認識することはとても大切だ。変容しつづける時代に、自分の足を下ろしている大地をしっかりと確認すること、それは自分の限界や弱さを自覚することでもあるし、仲間や家族とのつながりの実感であったり、目標を乗り越えて自信を得ることかもしれない。自分の現在点を把握しないと、ありもしない『自分探し』でとんちんかんな時間を費やしてしまうかもしれない。自分はどこにもいない、ココにいるだけ。部活動や旅先、恋愛やアルバイト、日常のヒトコマに、「自分」が世の中の確固たる一要素であること、それが人とのつながりの中で生きているということ。その中でできることが、やるべきことがあることを感じる瞬間がたくさん転がっている。経験を通して、時代の鮮度に左右されない生き方の土台を作ることができてきたと思う。

軌道修正はいつもやらなければならないし、無駄も多い。議論があったし、悩みもした。自分がよかれと思ってやったことが役に立たないこともあった。しかし、意味つけはどうでもよい。変化の真っ只中にある世界の現場でぶつかったたくさんの魅力的な出会い一涙、笑顔そして濃い時間。無力な自分に腹がたったこと、被災者の人間らしい怒りにとまどったこと、醜い人間の本性、美しい人間の本質の面白さ、先の読めない舞台の展開にはまっていった。その時はこれだけしかできない、しかしこれからこういうことをできる、夢というより目標が、自分の目を通して、脳で熟成されて、他人の価値観とぶつかって形になっていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この文章はこんな感じで１３ページ（！）も続くのですが、この辺にしておきましょう。立高時代は水泳部（自分の原点です）、合唱祭実行委員会、アメリカ交換留学、大学時代は探検部、バックパッカー（大学時代に９カ国）、ボランティア、演劇、ミュージカルに関わり、大学卒業後政府の事業東南アジア青年の船、アフリカの農村に１０か月滞在したのちイギリスで大学院で修士をとるまでにやりたいことを目いっぱいやってきた自分が自分の２５年間を振り返ったものです。

若いうちに積み重ねる経験は他人のためにやれることより、受けとるものの方が断然多いがこれはあとで違う形でつなげてそして社会に返していくものだと思っています。問題も悩みも、うまくいったことも人との出会いも、絶妙なタイミングで目の前に現れ、次の章の布石となっていきます。勉強も、バイトも、恋愛も、旅行も、趣味も、今自分が大事だと思うことに全力を注いでほしい。今自分がエネルギーと情熱を注いだものが自分の人生を作っていく。誰かに見せるためではない、自分が心からワクワクすること、人と時間に投資しよう。失敗してもよい、考え方がいろいろ変わっても当然。とにかく、よくわからないことに悩んでいる暇があるならば、自分の心が躍ることをやってみよう。今の自分の延長に大人になった自分がいます。今自分がワクワクすることをやっていなければ大人になって突然ワクワクする人間にはならないのです。自分が全力を注いだ有機的な過去は化石となることなく、原動力の原油となって現在進行形で自分を燃やします。自分に影響を与えた数々の偶然、失敗すらもあとからふりかえってみると、全部必然のことだったと思うのです。自分を幸せにできるのは自分だけだから、たくさんの可能性とドラマを作っていく素晴らしい人生の土壌を育てる高校時代をしっかり楽しんでください。今の自分が成長する原点を作ってくれた高校の後輩の皆さん、私でよかったらいつでも話を聞きますよ。

先輩より